

◆連載

いま留萌むかし 第三十九話

●留萌最初の自動車

旅館の前に一台の乗用車が止まっている。看板には旅館武内とされる。この写真は、大正十四年に写されたものである。

写っているのはT型フォード。世界で最初に量産され、ベストセラーになった自動車である。T型フォードが最初に大衆車として生産ラインにのったのは一九〇八年のことである。それが北海道の留萌に最初に導入されたのは大正十一年（一九二一年）のことであった。わずかに十三年間のうちにT型フォードがやってきたのである。

留萌に最初に自動車が見せたのは大正九年のことであった。森永キヤラメルの宣伝カーが来た時であった。これもT型フォードであったらしい。

写真に写っている車は留萌にはいつか最初の自動車ということができるかもしれない。

ただし、大正十四年にはT型フォードの最新車を購入しているという。初代の武内旅館所有の車は、お得意様の所有していたT型フォードを譲り受けたものだという。留萌駅から武内旅館までの送り迎えに使用していた。この車に乗って送り迎えされた人たちは、いったいどんな人たちであったのだろうか。また、当時の留萌町民はどんな目でこれをとらえたのだろうか。

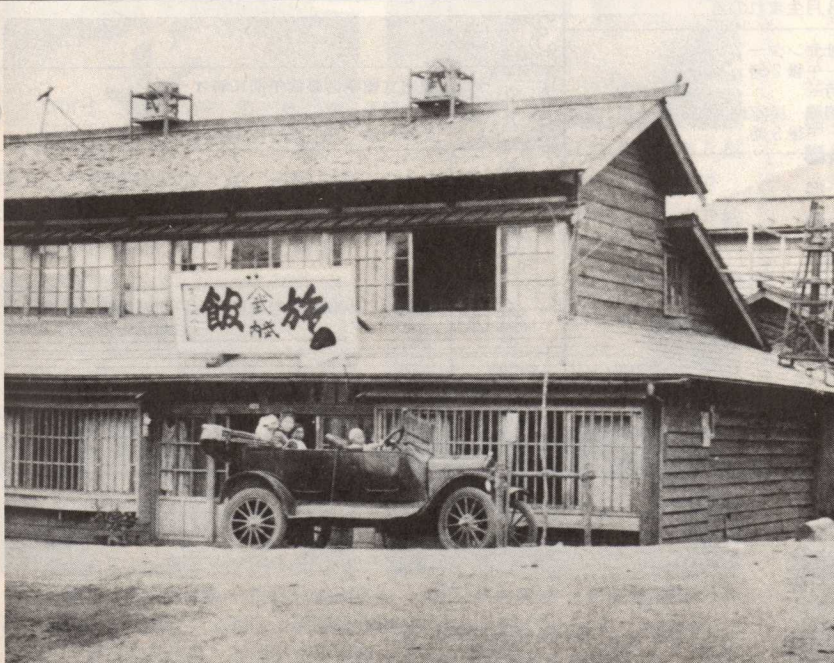
大正十四年には三台目のフォードが古野馬車店に入り、客の運送に活躍したという。その後留萌館でも中古車を購入し、大正の終わりから昭和の初めにかけては、三台の自動車が見え、留萌の道を走っていたことになる。

その後、留萌港の完成する昭和八年頃には四十八台の自動車が見え、留萌を走っていた。ただ、その頃より、日本が暗い戦争の時代へと突入すると共に、留萌の自動車台数は減少していき、本来町民の足としては、明治以来乗り合い馬車が主流であり、大正初期には驚田馬車店、古野馬車店、高木馬車店と三軒の乗り合い馬車店が六台の乗り合い馬車を運行させていた。このため、戦時下の留萌町民の足としてこの乗り合い馬車が活躍したことはいうまでもない。それと共に留萌の町民としては忘れてはならない交通機関があった。冬の交通の主役であった馬車である。夏の主役が馬車であったら、雪の上の主役はいわずとした馬車であった。これは戦後の高度成長時代になるまで主役の座に居座るのである。昭和三十年代からは自動車の大衆化と共に年々台数が倍増し、陸上輸送の主役の座をがちりと占めていくのである。

大正の初めに、森永ミルク

キヤラメルの宣伝カーを驚異の目で見て、留萌最初の自動車に驚嘆の声をあげた留萌の町民が、今日の留萌大通りの車の洪水を目のあたりにしたならば何というであろうか。時代と共に変わっていく交通手段に二十一世紀の留萌の人たちが大通りに何を見るのであろうか。

訂正とおわび
先月号の「留萌のチャシコツ」で全文中に「柵」とある文字は「柵」の誤りでありました。訂正しておわびいたします。



であろうか。